光市医師会報

平成７年10月号

No. 276

「楽しいな」

光市医師会

《会員広場》

私の昭和20年

福本寿雄

「何か面白いことを書いて下さい」と広報担当から原稿用紙を渡されたが、私には田尻先生や河内山　清先生のようなユーモアのある文章など書けるわけがない。仕方がないので、昭和57年に緑陰随筆を書こうとした時に、昔書いていた日記を倉庫の中から見付け出した。その折、昭和20年の時に書いた日記があったので、それを読み返してみると、今迄全く忘れていた旧制中学のことや敗戦引揚げのことを少しづつ思い出した。今年は終戦後50年目に当るとして、テレビや新聞などに50年間の思い出を、盛んに放送したり記事にしたりしている。考えてみると、昭和20年という年は、日本にとって大変な年であったが、私自身にとっても旧制中学卒業、医専入学、8月15日敗戦、引揚げ、転校試験という、一生涯に二度とない変化の多い年であった。くわしく日記に書いてあったので、それを添削してまとめてみた。

昭和20年1月1日（月）

午前4時起床、親友　横山泰治君と龍頭山神社（約4km）に歩いて参拝する。早朝の石段を登るのも清々しい。戦争の必勝を祈願し、宮城を遙拝する。東の空が次第に明るくなってきた。日の出を拝む。横山君の海軍兵学校合格を祝す。(私は落ちたが)。遂に親友とも別れねばならぬ。帰ってオトソを頂く。我も数え年19才となれり。中学も卒業だ。新年拝賀式に行く。

昭和20年3月20日（火）

釜山（プサン）中学卒業式。感慨無量。知事賞は竹中良三君だった。進学は、海軍兵学校6名、陸軍士官学校5名、京城大学予科6名、旅順工大3名、釜山高等水産(現下関の水産大学）20名、内地諸校20余名。皆夫々に進む道は違うが、皆の顔は希望に燃えている。楽しかった中学時代の思い出が、次々に浮んでくる。奉安殿前にて卒業証書を握って、夫々に別れた。幸に今日は空襲警報はならなかった。

昭和20年4月15日（日）

平壌医専（ピョンヤン）入学式。下宿屋を出て学校へ行く。きれいな学校だ。釜山中学より4名入学していた。日本人70名位、朝鮮人50名位だ。6対4の割合とか。高田校長の式辞のあと、3年の学生がピアノで「海ゆかば」を弾いて皆で歌った。

平壌の状況（ピョンヤン）

平壌府（市）は朝鮮第3の大都会で、京城（ソウル）、釜山に次いで人口約30万人位の都市である。冬は寒いところで、3月に受験に行った時には、大同江の大河は全面凍っていて、歩いて河を渡ったり、氷に穴をあけて釣をしている人もいた。寒い時には、零下30度以下になりビール瓶が割れた

昭和20年4月15日入学式後
（先輩の服や帽子を借りて）

り、時計の油が凍ったと言われているとか。平壌医専も、京城帝大医学部、京城医専に次いで古く、大邱（テーク）医専と同じ昭和2年に創立している。又教授、助教授も九大出身者が多く、小児科の遠城寺教授、放射線の阿武教授等は有名であった。

（下宿）東洋館と言う下宿で、下宿人の殆どが医専の学生で約10名位いた。4年、5年生は卒業が早められていたので、もういなかった。軍医学校に行っているか、軍医となって前線に行っているのであろう。現在3年生2名、2年生4名、1年生6名計12名であった。私の部屋は、7畳半のきたない小さな部屋に3人も入っているので、勉強どころではなく、酒を飲んだり、煙草を喫ったりして雑談ばかりしていた。下宿代は、3食付きで月12円50銭だった。しかし米が少く、大豆、豆粕、高粱、麦ばかりで、米粒は数える位しかなく、その上、大きい茶碗一杯しかない。これでは18才の若者には足りる筈がなく、近くの食堂に足を運んだ。食堂でも、殆どがウドンの切ったものだが何とか腹はふくれた。下宿の隣に「平壌ホテル」があり、そこに我々より若い少年航空兵が、毎日入れかわり、立ちかわり泊りにくる。若いのに皆元気がないので、窓から声をかけてやり、遊びに行ったり、来たりした。聞くと「明日特攻隊で出撃する」と言う。しかも「沖縄あたり迄の片道の燃料しか積込めないので、燃料がなくなれば、海に突込むか、九州あたりで不時着しかない」という。しかし、不時着することは脱走兵と看做されるとのことで、いずれにしても死を覚悟せねばならないので、シュンとしていたのであった。煙草や菓子を貰ったり、酒を飲ましたりしたが、最後には、人生の最後に遊郭に行きたいが、どうしたら良いかと聞かれる。私も遊郭など行ったことないので判らないので、岡嶋の解剖学の本をみせて、知った振りして説明したものであった。しかし、2～3日後他の航空兵から未帰還機だったと聞かされると、今度は、こちらが元気がなくなり、シュンとしたものだった。又先生方が、次々に出征されるので、週に1回位送別会をするので、酒を朝鮮人の家に密造酒(濁酒)朝鮮語で「マッカリ」をよく買いに行かされた。そしてよく飲まされた。

（授業）最初の授業は、獨語、解剖学、生理学、医化学位であり、獨語、生理学は面白かった。しかし解剖学や医化学などは、教授、助教授が殆ど応召されていて、朝鮮人の助手しか残っておらず、たどたどしい日本語で講義するので、聞きとりにくく、まじめに聞いている人は殆んどいなかった。その中で、特に厳しかったのは教練で、雨

の中でも匍匐(ホフク)前進を、何回も何時間もやらされたのには、全く参った。しかし、平壌の薬専や工専に行っている連中は、授業は殆どせず、勤労動員に行かされていたが、医専だけは軍医が足りないのか、勤労動員は免除されていたのは有難かった。

昭和20年8月15日（水）敗戦の日

平常通りに朝登校すると、「8月9日にソ聯が満洲に侵攻してきたので、明日学生隊を編成して、鴨緑江附近に迎撃に行くので軍刀等を持ってこい」とのことであった。そして、本日午後0時に、重大放送があるので自宅に帰って、ラジオを聞くように…との通達があった。下宿に帰って、12時にラジオのスイッチを入れた。すぐに「君が代」が流れてきたので、多分ソ聯との宣戦布告の詔勅と思った。天皇陛下の玉音が流れたが、ラジオに、ピーピーガーガーと雑音が入り、何と言っておられるのか、よく判らなかった。陛下の御声が終っても、まだ判らない。つゞいて、アナウンサーの説明があり、やっと停戦の詔勅だったことが判った。陛下には、広島、長崎の強大な爆弾により全滅したとのことをみられて、我々にこれ以上の苦しみをさせるのは、絶え難いと思われたのであろう。日本も開国以来、一度も敗れた事もないのに、今度刀折れ、矢尽きての降伏したと判り、ほんとに断腸の思いで、思わず泣きくずれた。しかし一面、何か肩の荷が降りたような、ほっとした気分でもあった。それは昭和18年頃より戦争の形勢が悪くなり、空襲警報で防空壕に入ったり、竹槍、銃剣術の稽古をしたり、いつ米英が南方から上陸してくるか知れないと思うと、何だか追いつめられた感じであった。それがなくなったと思うと、安堵したと言うよりも何か気がぬけたと言うか、虚脱感のような感じであった。その晩、下宿で先輩や友人達と今後のことを、色々と話し合った。その結論は、

- まだ関東軍が健在だから、皇太子殿下を立てて、戦争を継続すると言う噂。(デマ)
- 日本が負けたとしても、38度線を境にして、北からソ聯が、南からは米英が入ってくるが、ソ聯との戦争は短期間なので、ソ聯の方がひどい仕打ちはしないだろう。

などと議論が百出して、結局、平壌に残ろうと言う人が多かった。しかし私は、どうせ苦しい目に会っても、南朝鮮にいる父母と一緒の方が良いと思い、南朝鮮に帰ることとした。（後で判ったことだが、平壌に残った人は殆どがソ聯に引張られて行って、日本に帰国していない。）

昭和20年8月16日（木）敗戦翌日

昨夜、牡丹台にある平壌神社が朝鮮人によって焼かれたとのことであった。今日もいつものように登校した。出席者少ない。1時間目、2時間目となり皆落着かないとみえ、少しづゝ帰っていく。3時間目に獨語の福山教授が、陛下の御心や、日本の将来のことを話されたが、とうとう話も途絶え、皆泣き出した。しかし朝鮮人の学生は、キョトンとしていた。やはり朝鮮人には我々の気持は判らないのであろう。午後から、武道場に日本人だけ集って話を聞いた。明日から夏休みにすると言われ、皆に帰宅、帰国するように言われた。そして、担任教授の小原先生から旅行証明（割引証）を頂

いた。その後、平壌市内に出ると、朝鮮人が、バンシヤイ、バンシヤイと言って大騒ぎをしている。町のガラスというガラスに独立万歳の紙を貼り、電車にも朝鮮の旗を掲げて大騒ぎだ。これからの朝鮮半島がどうなるかとも考えずに……。

昭和20年8月18日（土）敗戦4日目

昨日、光州迄の切符をやっと買い求めたので、朝8時に荷物を一杯持って下宿屋を出た。フトンや不要のものは下宿屋に置き、大きなリュックサックと大きなカバンと日本刀の三つだ。真夏の暑い日だった。平壌駅に着くと、駅は朝鮮人で一杯だ。汽車はいつ着いて、いつ発車するのか全く判らない。朝鮮人の駅員に聞くと、「切符を持っておればどれでも良いから乗れ」と言う。前の方に貨車が停っていたので、それに乗せて貰った。その貨車には、満洲からの憲兵達が乗っていた。早いとこ逃げ出したものだ。しかし日頃の憲兵の威厳はなく、敗戦の為か逃亡兵のように肩を落してシュンとしていた。今年4月に、父が釜山の女学校から全羅南道の光州の中学校長に転勤したので、京城で降り大田（テージョン）から湖南線に乗らなくてはならない。その為、京城で降りて一泊し、又裡々（イーリ）に着いて一泊したため、10時間で帰れるところを3日もかかってしまった。そして、8月20日の午後2時頃光州（クワンジュ）に到着してほっとした。しかし、3日後には、38度線を境に列車がストップしたとの連絡が入った。早く帰ってきて良かったと思った。（その後の人は、夜中にこっそり38度線を歩いて越えたらしい）。しかし、持っていた荷物の内、リュックサックは貨車の中で亡くなり、カバンは京城駅で韓国人に盗まれ、とうとう日本刀1本になってしまった。その変り、日本刀だけの身軽さになれ不安な情勢なのでいつでも刀が抜けるように、鯉口を切って持っていた。

昭和20年9月16日（日）敗戦1ケ月後

父が中学校長をしている為、後任が来る迄は帰れないとのことで今日迄帰国を延期した。光州駅で満員の列車に乗り、3日がかりで釜山駅に到着した。釜山はやはり日本人の多いせいか、割合に平穏であり、あまり問題はなかった。（盗難が多かったが）。丁度その頃、日本では枕崎台風が来ており、船は転覆したり鉄道は不通になったとの知らせで、帰国を又延期した。釜山に1ケ月位滞在している間にも、いろいろと敗戦の姿を見せつけられた。

(1)満洲あたりからの引揚者が続々とやってくるが、心身共に疲れ切っていて、まるで乞食の姿である。寺や学校に分宿して乗船を待っているが、炊事はその辺の石を集めて、俄か造りの竈でチョロチョロ出る共同水道に行列して米を洗っていた。誠に気の毒なもので、米兵がこれを写真にとっていた。

(2)釜山の桟橋に行ってみると、これが唯一の財産とばかり、山の様な荷物を背負っている者がいて、後から見ると、頭や足が見えないので荷物が歩いているようであった。笑うに笑えぬ有様であった。

(3)釜山から光州への転勤の折は、荷物が、160個あったが、引揚げの折は切符1枚につき荷物1個とのことで、切符を10枚買い求

め、大事な物ばかりを10個にまとめて、チッキとして釜山向けに送った。しかし何日達っても荷物が届かず、知人が、「お母さんの着物が韓国市場で売られていたよ」と教えてくれた。夜中に駅に停車している貨車に侵入して盗まれたことが判った。

昭和20年10月21日（日）敗戦２ケ月後

今朝「乗船したいなら、すぐ桟橋に集まれ」との知らせで、早速に弁当を作って午前10時に桟橋に行った。米兵が入れ替り、立ち替りやってきては、荷物や身体検査をするだけでなかなか乗船させてくれない。午後11時になってやっと乗船したが、人数が少ないからと言って出航停止となり、翌22日の夕方６時にやっと出航した。その上に大時化で船も大揺れ、食べ物もないので皆胃液ばかり吐いており、皆死んだようにぐったりしている。翌朝23日午前４時頃、仙崎港に到着したが、まだ暗いので午前７時に、小さな連絡の船がやって来て、一番最後の船に乗って仙崎の土を踏んだ。雨上りなので、地面がじめじめしている。米軍がいたのは、いやだったが、日本に帰ったと言う気持は何とも言えぬうれしい、なつかしい気持であった。何だか母の胸に抱かれたような思いであり、これなら少々食糧で苦しんでも良いような気がした。

嗚呼〝紀元2605年、昭和20年〟

我國開闢以来の悲惨 !!

敗戦の悲惨 !!

我等　青年若人　何をなすべきか？

我等　世界各國のことを広く認識し、

必ずや　日本の復興を期せん。

そして神國日本の陛下の御稜威　を

世界に　輝かさん。

（昭和20年11月30日記）

定例理事会

日時：９月13日(水)　午後７時30分～

場所：医師会事務局

出席者：近藤、前田、梅田、藤原、市川
赤崎、藤村、光武、吉村

議題：

１）医療情報システム担当理事協議会の報告　（光武理事）

２）医事紛争担当理事協議会の報告　（藤原理事）

３）周南医学会の打合せ　（赤崎理事）

４）休日診療所について　（近藤会長）

５）その他

㋑結核審査委員推選の件

㋺下松・光市医師会合同保険研究会の件

㋩光市医師会役員と市民（保健センター協力団体）との懇談会の件

9月度例会

日時：9月26日㈫　午後7時30分
場所：光商工会館（大研修室）
出席者：22名
議題：
1）医事紛争研究会
「平成6年度の医事紛争の事例について」

講師　担当理事　**藤原邦彦先生**

2）「自賠責診療費算定基準の手引」の説明

講師　担当理事　**光武達夫先生**

周南三市医師会・歯科医師会及び周南地区健康保険組合との懇談会

日時：9月14日㈭　午後4時～　　場所：東洋鋼板健保会館（下松市）

出席者：光市医師会
近藤会長、前田副会長
光武理事、藤村理事、吉村理事

（質問）

記号、番号の誤りの通達について何ケ月も遅れて返されることがある。つい最近、半年以上も前のレセプトが生年月日の日付が違うということで返された。保険証で確認してみるとレセプトに記入されたものに間違いなかった。これは被保険者の記載ミスかもしれないがその方の保険証の生年月日の誤りを正さず一方的に医療機関に責任をおしつけるのはどんなものでしょうか。

（回答）

○周陽地協の7健保組合には、このようなケースはあり得ない。
○医療機関でカルテあるいはレセプ等に転記する前にミスが発生しないかぎりは考えられない事だと思う。
○またかりに、生年月日が違ったとしても調査して、本人に間違いなければ返却はしていない。

（質問）

資格喪失後受診も一向に改まった様子がありません。月の途中に退職などは患者の

9月医師会月間行事

日	行事	場所
7	周南医学会準備委員会	光市民ホール
8	心電図研究会	光商工会館
13	9月定例理事会	医師会事務局
14	周南三市医師会・歯科医師会と周南地区健康保険組合との懇談会	東洋鋼鈑健保会館
26	9月度例会	光商工会館

IIIII あとがき IIIII

「霜降」の頃になると、北の方から紅葉の便りが届いてきます。大変いい気候を向えております。

周南医学会も無事終了いたしました。当日は早朝があいにくの小雨模様で、午後の天候が心配されましたが、昼前より薄日がさしてやや胸をなでおろしておりました。そして午後の会場は満員の大盛況でした。「最近、空席の目立つ夢を見て睡眠不足である」ともらしておられた近藤会長の口元の綻びが、会の成果の状況のすべてを物語っておりました。会員の皆様ご苦労様でした。

今月は福本先生に旧い日記を披露していただきました。「解剖学の本と遊郭」という組合せが対象的で、大変印象に残りました。死を間近にひかえた青年が、解剖学の本を一生懸命みつめたのでしょう。青春のなかばに片道の燃料で飛び立って行く青年の心に、死という事実はどのように映っていたのでしょうか。

表紙の写真は、地域文化祭での幼稚園児の遊戯のひとこまです。園児の無邪気に踊る姿を見て、改めて平和の尊さを感じます。

（吉村）

発行所	光市医師会 TEL 0833 72－2234
発行者	近藤龍一
編集者	広報担当
印刷所	光市光井一丁目15番20号 中村印刷株式会社